

Title	1606年カイロの石鹼騒動とその背景：未活用史料『マバーヒジュ』による考察
Sub Title	The soap shortage of 1606 in Ottoman Cairo : some considerations based on Mabāhij al-ikhwān
Author	長谷部, 史彦(Hasebe, Fumihiko)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2019
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 人文科学 (The Hiyoshi review of the humanities). No.34 (2019. ) ,p.165- 186
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	研究ノート
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10065043-20190630-0165">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10065043-20190630-0165</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 研究ノート

## 1606年カイロの石鹼騒動とその背景

——未活用史料『マバーヒジュ』による考察——

長谷部 史彦

## はじめに

エアフルト大学ゴータ研究図書館所蔵のアラビア語稿本『諸時代の事件についての同胞たちの喜びと友人たちの平路』(以下、『マバーヒジュ』)は、オスマン朝エジプト州の16世紀末から17世紀初頭に至る動乱期に関する最も重要な叙述史料であるが、何故かこれまで研究者に注目されず、管見の限り利用されてこなかった<sup>(1)</sup>。著者のイブン・アジャミー Shihāb al-Dīn Aḥmad b. Aḥmad b. ‘Abd al-Raḥmān b. al-‘Ajāmī はスンナ派のアーリム(学者)であったが、教育職や宗教職に就くことなく専ら計量士(qabbānī)として働くことで生計を立て、余力をカイロ南郊の墓廟地区カラーファの参詣励行者(ザール)としての活動にも振り向けながら、308葉に及ぶこの大部な史書に加えて84葉から成る未完の続篇を書き残し

(1) Ibn al-‘Ajāmī, *Mabāhij al-ikhwān wa manāhij al-khillān fi ḥawādith al-duḥūr wa al-azmān*, Forschungsbibliothek Gotha, Ms. orient. A 1631. この動乱期には、エジプトでは州の正規軍による諸反乱、アナトリアや北シリアではジェラーリ諸反乱が起こり、社会の動揺や流動化が顕著になった。とりあえず、Michael Winter, “Ottoman Egypt, 1525-1609”, M. W. Daly (ed.), *The Cambridge History of Egypt*, vol. 2: *Modern Egypt from 1517 to the End of the Twentieth Century*, Cambridge: Cambridge University Press, 1998, pp. 17-20及びWilliam J. Griswold, *The Great Anatolian Rebellion, 1000-1020/1591-1611*, Berlin: Klaus Schwarz Verlag, 1983を参照のこと。

た<sup>(2)</sup>。いずれも著者の自筆稿本とみられるこの『マバーヒジュ』とその続篇は、整理不足といった印象を読み手に抱かせる、多分に混沌とした外観を呈している。しかし、当該期の大都市カイロを中心としたエジプトの政治・経済・社会・文化の諸側面について多量かつ多様な独自情報を供する第一級史料であることは確かであり、とりわけ計量を稼業とした著者が州都の市場経済の「参与観察者」として綴った諸々の記述は、比類なき価値を有しているといえよう。

本小論では、同時代諸史料の中でこの『マバーヒジュ』のみに関連記述が確認され、これまでに研究上の言及が全くなかった、1606年のカイロにおける石鹼の不足とそれをめぐっての騒動に照準を定め、その具体的様相を可能な限り解明し、当該期の時代状況の中にこれを定位することを試みる。まず当時のアラブ地域において最大の消費都市であったカイロへの石鹼の供給に関する先行研究の成果を整理し、続いて『マバーヒジュ』を中心にこの騒動が起きたハサン・パシャ期カイロの政治・経済情勢について把握したうえで、本題の検討へと進むことにしたい。

## 1. オスマン朝期カイロにおける石鹼の供給

当該期のカイロにとっての石鹼の主要な供給地は、直線距離で約500kmの地点に位置し、豊かなオリーブ栽培地域を後背地にもつ、シリア随一の石鹼生産都市のイェルサレムであった<sup>(3)</sup>。マムルーク朝末期にこの重層的聖地の石鹼（オリーブ石鹼）の生産は衰微していた。しかし、オスマン朝期に入るとスレイマン1世（在位1520-1566年）の積極的な聖地保護策な

(2) Ibn al-'Ajamī, *Tārīkh al-'Uthmān*, Forschungsbibliothek Gotha, Ms. orient. A 1632. この一連の史書の内容構成や史料性格、著者の人物史や人脈などについては現在準備中の別稿において詳論する予定であるが、ひとまずは拙稿「17世紀初頭のオスマン朝エジプト州総督と祈願式—『マバーヒジュ』とその続篇に基づく覚書」『史学』88巻2号（2019年）、1-22頁を参照されたい。

(3) Amnon Cohen, *Economic Life in Ottoman Jerusalem*, Cambridge: Cambridge University Press, 1989, pp. 85-86. なお、19世紀にはイェルサレム

ども作用して都市社会・経済の全般的な発展がみられ、16世紀末には大小合わせて18の石鹼工房 (maṣbana) が市内に所在し、活発な生産活動が展開されていた。例えば、最大規模のミーラーニーヤ石鹼工房 al-Mirāniyya はオリブ油市場 Sūq al-Zayt の後背に位置し、16の貯蔵穴 (bi'r) を備える生産施設であった。これらの工房の運営主体は、ズライク家 Ibn Zurayq, ジャームース家 Ibn Jāmūs, ミーラーン家 Ibn Mirān, シャルウィーン家 Ibn Sharwīn, サンムーム家 Ibn Sammūm, ドウハイナ家 Ibn Duhayna, アブー・シャリーフ家 Ibn Abī Sharīf といった都市名家に属する経営者たちであり、卸商を兼ねていた彼らは一つの石鹼卸商組合を成していた<sup>(4)</sup>。こうした経営者の下で石鹼生産の管理責任を負う工房長 (amīn) は長期に雇用されたが、石鹼の製造 (ṭabkh) に携わる職人 (maṣābinī) については移動性が顕著であった<sup>(5)</sup>。石鹼工房経営者=卸商はカイロに代理人を常駐させてイェルサレム・カイロ間の石鹼交易を組織した。ルート上のアラブ諸部族に対する安全保障のための特別税 (khafar) は低額とはいえず、石鹼の輸送コストは海路の約2倍に達したが、ファランジュ (ヨーロッパ人) の海賊による強奪などもあって海上輸送の危険度は高いとされ、主に陸上輸送が選択されていた<sup>(6)</sup>。そして、当該期のイェルサレムでオリブ油は投資・貯蔵の対象としても重要であったが、都市人口の増加と生活水準の向上に伴う石鹼需要の増大を背景に、

---

の北方約50kmに位置するナーブルスがシリア随一の石鹼生産都市へと成長した。詳しくは Beshara Doumani, *Rediscovering Palestine: Merchants and Peasants in Jabal Nablus, 1700-1900*, Berkeley: University of California Press, 1995, pp. 182-232を参照のこと。なお、中東史における石鹼については、A. Dietrich, "Sābūn", *Encyclopaedia of Islam*, 2nd edition; Willem Floor, "Soap", *Encyclopaedia Iranica* に概要が示されている。

(4) Cohen, *Economic Life in Ottoman Jerusalem*, pp. 61-74, 82-84. イェルサレムの石鹼卸商組合、及びタシュビーク (tashbīk) と呼ばれる石鹼の積上げの特殊技能をもつ石鹼運搬人 ('attāl) の組合については、Amnon Cohen, *The Guilds of Ottoman Jerusalem*, Leiden: Brill, 2001, pp. 167-175を参照のこと。

(5) Cohen, *Economic Life in Ottoman Jerusalem*, pp. 81-82.

(6) Cohen, *Economic Life in Ottoman Jerusalem*, pp. 87-91.

オリーブ油に比べて長期貯蔵に一段と好適な石鹼への投資が活発化した。石鹼価格は1550年代から上昇傾向を示し、同世紀末になるとしばしば高騰したため、都市の資産家にとって石鹼の生産と交易は極めて魅力的な投資対象となったのである<sup>(7)</sup>。

石鹼は各種織物や煙草と並んで、オスマン朝期にエジプトへと供給されたシリア（ビラード・アッ＝シャーム）の主要産品であった<sup>(8)</sup>。主産地のイエルサレム、それに一部はナーブルスなどから、中小規模の隊商の陸上輸送によってハリール（ヘブロン）またはアスカラーン（アシュケロン）へ、そこから石鹼生産都市としての一面をもつガザへ、そしてアリーシュ、サーリヒーヤを経由してカイロへと石鹼がもたらされた。こうした隊商運輸を担ったのは、イエルサレムの石鹼運輸業組合とタッラービーン Tarrābīn をはじめとしたアラブ諸部族であった<sup>(9)</sup>。またこれ以外に、シリア最北部のイスケンデルン港からエジプトのダミエッタ港へと海路で運び込まれる石鹼もあったが、ダミエッタでの高額関税などの影響でこのルートでの輸入量は少なかった。フランス占領期の記録によれば、全体で年間1000～1200箱がシリアからエジプトへと輸入され、各箱には700～800ラトル（約310～354kg）の石鹼が収められていたという<sup>(10)</sup>。また、こうした

(7) Cohen, *Economic Life in Ottoman Jerusalem*, pp. 91-96. 1530年から1599年までのイエルサレムにおけるオリーブ油と石鹼の価格については Cohen, *Economic Life in Ottoman Jerusalem*, pp. 140-145の変動表を参照のこと。

(8) André Raymond, *Artisans et commerçants au Caire au XVIIIe siècle*, 2 tomes, Damas: Institut français de Damas, 1973-1974, tome 1, pp. 189-190. これに対して、エジプトからシリアへと運ばれた主な産品は米・ソラ豆・レンズ豆、それにリネンであった。フランス占領期に関する P.- S. ジラールの推計によれば、エジプトからシリアへの年間輸出総額は約1億3135万ニスフ、輸入総額が約2億1054万ニスフで、明らかにエジプト側の輸入超過の状態にあった (Raymond, *Artisans et commerçants*, pp. 190-191.)。

(9) Cohen, *The Guilds of Ottoman Jerusalem*, pp. 175-177; Raymond, *Artisans et commerçants*, p. 190. なお、この同職組合にはキリスト教徒やユダヤ教徒の構成員の存在も確認されている。

(10) Saḥar 'Alī Ḥanāfī, *al-'Alāqāt al-tijāriyya bayna Miṣr wa bilād al-Shām al-*

シリア石鹼の一部はカイロからスーダーン（サハラ以南アフリカ）地域へと再輸出された<sup>(11)</sup>。

オスマン帝国エジプト州の州都カイロには、中枢域のカーヒラを中心に360もの商館が散在していたが、その中で石鹼取引の枢要な場として機能していたのは、シリア系商人の活動が集中するナスル門内のジャマーリーヤ（ガマレイヤ）地区に位置した石鹼商館 *Wikālat al-Ṣābūn* であった<sup>(12)</sup>。マムルーク朝期の15世紀まで、同商館は設立者の有力アミールの名を冠して「カウスーン商館 *Wikālat al-Amīr Qawṣūn*」と呼ばれていた<sup>(13)</sup>。後のフランス占領期の記録によれば、同商館の石鹼卸商たちは単一の同職組合を成し、当時の組合長はヘブロン由来名をもつ著名な富商のアフマド・ザルー *Aḥmad al-Zarū al-Khalīlī* であった。他方、カイロの石鹼小売商たちはこれとは別の組合を結成していた<sup>(14)</sup>。そして、石鹼の一部はクルディー商館 *Wikālat al-Kurdī*、ムッラ商館 *Wikālat al-Mulla*、シーシーニー商館 *Wikālat al-Shīshīnī*、林檎商館 *Wikālat al-Tuffāḥ*、さらにはハーン・ハリリー *Khan al-Khalīlī* などでも取引されていた<sup>(15)</sup>。また、同じ「石鹼商館」という呼称をもつ商館は、カイロの河港のブーラクにも存在した。

---

*kubrā fī al-qarn al-thāmin ‘ashar*, Cairo: al-Hay’a al-Miṣriyya al-‘Āmma li-al-Kitāb, 2000, pp. 194-195.

(11) Raymond, *Artisans et commerçants*, p. 172; Terence Walz, *Trade between Egypt and Bilād as-Sūdān, 1700-1820*, Cairo: IFAO, 1978, pp. 43-45.

(12) André Raymond et Gaston Wiet, *Les marches du Caire: Traduction annotée du texte de Maqrīzī*, Cairo: IFAO, 1979, p. 291.

(13) Raymond et Wiet, *Les marches du Caire*, pp. 140-141. マムルーク朝後期のマクリーズイーの地誌によれば、そこは既にシリア産品を扱う商館で、石鹼のほかにはオリーブ油や胡麻油、干し葡萄、それにピスタチオなどのナッツ類が取引され、1403-1404年の社会経済危機の前には上層階に360の居室 (bayt) を備え、約4000人の老若男女の居住者を収容していた。また、17世紀初頭の石鹼商館の収容規模の大きさは、1016年第3月12日 / 1608年6月26日にイスタンプルからカイロに到着したイエメン州への増派軍約1000名が同商館とバイバルス二世学院に宿泊したという事実に窺えよう (*Mabāḥij al-ikhwān*, fol. 294.)。

(14) Raymond, *Artisans et commerçants*, pp. 337-338, 522.

(15) Raymond, *Artisans et commerçants*, p. 338.

フランス占領期の徴税請負額は、カーヒラの石鹼商館が30万ニスフ、ブーラクの石鹼商館が30万7000ニスフであり<sup>(16)</sup>、ナポレオンが創出したフランス占領体制は両商館の経済的な重要度をほぼ同等とみなしていたといえるよう。

## 2. ハサン・パシャの施政とカイロの市場動向

スーフィー出身のイブラーヒーム・パシャ Ibrāhīm Bāshā al-Şūfī は 1012 年第 12 月末日 / 1604 年 5 月 29 日にエジプト州総督に着任したが、1013 年第 4 月 29 日 / 1604 年 9 月 24 日、カイロ郊外で軍 (jund) の反乱勢力に不意を突かれ、ブハイラ県総督 (kāshif iqīm al-Buḥayra) とアレクサンドリア港徴税請負人 (multazim bi-thagr Sikandariyya) を兼務していたムハンマド・ブン・フスリフ Amīr Muḥammad b. Khusrif と共に討ち取られ、赴任後僅か約 4 ヶ月でその任期を終えることとなった。イブラーヒーム・パシャは、カイロの河港ブーラクの北方に位置するカナータイル・ムナッジャー灌漑土手 Jisr Qanāṭir Munajjā の運河開き行事を主催した後、近くのマフムート・パシャ宮 Qaṣr Maḥmūd Bāshā で一晩を過ごし、翌日急襲されたのであった。イブン・アジャミーは『マバーヒジュ』に「彼ら (反乱者たち) は二人の首級とともにカーヒラの目抜き大通りを巡行し、その後ズワイラ門にそれらを吊るした。」と記している<sup>(17)</sup>。正規

(16) Stanford J. Shaw, *The Financial and Administrative Organization and Development of Ottoman Egypt: 1517-1798*, Princeton: Princeton University Press, 1962, p. 140. ネッリー・ハンナーはオスマン朝期のブーラクにあった 65 の商館のうち 45 についてその所在地を確認して地図上に示しているが、同港の石鹼商館の位置把握には至っていない (Nelly Hanna, *An Urban History of Būlāq in the Mamluk and Ottoman Periods*, Cairo: IFAO, 1983, pp. 65-66)。

(17) 以上, *Mabāhij al-ikhwān*, fol. 145. Cf. Al-Ishāqī al-Munūfī, *Kitāb akhbār al-uwal fī man taṣarrafa fī Miṣr min arbāb al-duwal*, Cairo, 1276 A. H. [以下, *Akhbār al-uwal*], pp. 351, 354; Ibn Abī al-Surūr al-Bakrī, *al-Minaḥ al-raḥmāniyya fī ta'rīkh al-dawla al-'Uthmāniyya*, Damascus: Dār al-Bashā'ir, 1995 [以下, *al-Minaḥ al-raḥmāniyya*], p. 291; Id., *al-Nuzha al-zahiyya fī dhikr*

軍の一部による現役州総督の殺害というこの衝撃的事件の後、主席カーデーのムスタファ・エフェンディ Muṣṭafā Afandī b. ‘Azmi の州総督臨時代理 (qā’im maqām) の時期を挟み、1013年第7月28日 / 1604年12月20日には宦官のハドゥム・メフメト・パシヤ Muḥammad Bāshā al-Tawāshī が州総督に着任した<sup>18)</sup>。当初、ハドゥム・メフメト・パシヤはサイイダ・ナフィーサ聖廟、サイイダ・ザイナブ聖廟などカイロの人気女性聖者の廟において犠牲儀礼をとり行ない、また貧者にサダカ (任意の喜捨) を施すなどして州都で好評を博したが<sup>19)</sup>、間もなく物価高騰と食糧不足への政策的対応を余儀なくされることとなった<sup>20)</sup>。

このハドゥム・メフメト・パシヤの後を受け、1014年第3月1日 / 1605年7月17日、ハサン・パシヤ Ḥasan Bāshā がエジプト州総督に就任した<sup>21)</sup>。これに先立って、イエメン州総督の任にあったハサン・パシヤは、メッカに立ち寄って東方の聖地アラファでのウクーフ儀礼などの巡礼を遂行し、その後ハッジ巡礼団のカイロへの帰還に先行して1014年第2月12日 / 1605年6月29日に新任地カイロに来着し、ウマル・シャー橋 Qanṭarat ‘Umar Shāh 近くのダーウード・アーガー邸 Bayt Dāwūd Āghā al-Kabīr で待機していたのである<sup>22)</sup>。そしてハサン・パシヤの着任後の1014年第3月11日 / 1605年7月27日、ハドゥム・メフメト・パシヤはカイロ城の州総督府を後にした<sup>23)</sup>。『マバーヒジュ』によれば、メフメト・パシヤはブ

---

*wulāt Miṣr wa al-Qāhira al-mu‘izziyya*, Cairo: al-‘Arabī li-al-Nashr wa al-Tawzī, 1998 [以下, *al-Nuzha al-zahīyya*], p. 177.

18) *Mabāhij al-ikhwān*, fols. 25v, 146r. Cf. *Akhbār al-uwal*, p. 356; *al-Minah al-rahmāniyya*, p. 296; *al-Nuzha al-zahīyya*, p. 179.

19) *Mabāhij al-ikhwān*, fol. 152r.

20) *Mabāhij al-ikhwān*, fols. 152r-153r.

21) *Mabāhij al-ikhwān*, fol. 169. Cf. *Akhbār al-uwal*, p. 356.

22) *Mabāhij al-ikhwān*, fol. 168. ちなみに、この部分の年代記事には「オスマン朝とエジプトを統治したパシヤたちの記述として私がまとめた小冊子 (kurrāsa) の中で述べたとおり」との文言がみられ、イブン・アジャミーの手になる別の「小史」があったことがわかる。

23) *Mabāhij al-ikhwān*, fol. 169v.



ーラーク港から出立するため、近くのイブン・ジーアーン学院 *Madrasat al-Qāḍī Ibn al-Jīʿān* 前のマフムード・パシヤ邸 *Bayt Maḥmūd Bāshā* へと居を移したが、その際、カーヒラの住民が彼に対する神罰を祈願したという。イブン・アジャミーは、「もしハサン・パシヤが同行していなかったならば、彼らは彼（メフメト・パシヤ）に対してその不正（*ẓulm*）の多さから投石していただろう」と付記している<sup>24</sup>。この段階で、州都住民がハドゥム・メフメト・パシヤの施政に対して強い義憤の念を抱いていたことがみて取れよう。

そしてハサン・パシヤの着任後間もなく、ブーラーク港の河岸への穀物（小麦）の供給が不足する事態となった。イブン・アジャミーによれば、その原因は州総督府に属する穀物（*ghilāl dīwāniyya*）の輸送のために穀物商人たちの運搬船が強制的に徴用されたことにあった。こうした事態にハサン・パシヤはブーラークで布告を公示し、一般の船頭たちに船の徴用に応じるよう命じ、他方で農村部から穀物を運び入れるジャッラーブ商人たちの商業活動を保護する姿勢を明示した。こうした施策の結果、多量の穀物が供給されるようになったという<sup>25</sup>。その後1014年第3月30日／1605年8月15日にナイル川が16ズィラーウの「満水」に達すると、ハサン・パシヤはブーラーク港で「黄金船（*dhahabiyya*）」に乗り込み、サンジャク・ベイたち（*ṣanājiq*）やアミールたちの乗った複数の船を従え、ローダ島の水位計測施設のミクヤースまでナイル川を南へと遡行し、その後、恒例のミスル運河開きの式典を主催した<sup>26</sup>。それは、大河ナイルの灌漑農業社会の役割期待に応える伝統的王権の振る舞いを踏襲した、エジプト州の最高権力者の政治行動であったといえるだろう<sup>27</sup>。

<sup>24</sup> *Mabāḥij al-ikhwān*, fol. 169v. 住民の政治批判に関するこの注目すべき記事はこの葉の欄外に同じ筆跡で斜めに書き足されている。

<sup>25</sup> *Mabāḥij al-ikhwān*, fol. 169v.

<sup>26</sup> *Mabāḥij al-ikhwān*, fol. 171v. 満水儀礼については中世に関する拙稿「イスラーム都市の食糧騒動——マムルーク朝時代カイロの場合」『歴史学研究』612号（1990年）、22-23頁を参照されたい。

表1 ハサン・パシャ期（1014年第3月-1016年第1月／1605年7月-1607年5月）のカーヒラのムフタスイブ

No.	氏名	就任	解任	典拠 ( <i>Mabāhij al-ikhwān</i> )
①	イフサーン・ジャーウイーシュ	1013年第12月／ 1605年4-5月	1014年第4月／ 1605年8-9月	163, 172r
②	カーディー・アリー・カービー	1014年第4月／ 1605年8-9月	1014年第6月1日 ／1605年10月14日	172r, 173
③	サファル・ジャーウイーシュ	1014年第6月1日／ 1605年10月14日	不明	173
④	ムハンマド・ジャーウイーシュ	1015年第2月1日／ 1606年6月8日	1015年第2月／ 1606年6-7月	182v, 185v-186r
⑤	アリー・ジャーウイーシュ	不明	1015年第4月19日 ／1606年8月24日	194v
⑥	ハサン・パシャのタービウ（従者）	1015年第4月19日／ 1606年8月24日	不明	194v

ここで、州都の市場行政の責任者であった「カーヒラのムフタスイブ muhtasib al-Qāhira」について、『マバーヒジュ』の記載情報をハサン・パシャ期に限って整理しておきたい<sup>28)</sup>。『マバーヒジュ』に確認される当該期のカーヒラのムフタスイブは表1のとおりである。このうちアーリム（学者）であることが唯一確認される人物が、②のカーディー（法官）のアリー・カービー‘Alī al-Kābīである<sup>29)</sup>。ジャーウイーシュ（チャヴシュ）

27) オスマン朝エジプト州総督による中世エジプト王権の政治文化の継承については、Doris Behrens-Abouseif, *Egypt's Adjustment to Ottoman Rule: Institutions, Waqf and Architecture in Cairo (16th and 17th Centuries)*, Leiden: Brill, 1994, pp. 54-60を参照のこと。

28) 17世紀前半まではムフタスイブが州都の市場行政の責任者であったが、同世紀後半以降は都市経済への影響力を高めたイエニチェリ軍の軍団長やその配下が担うようになっていった。これに関しては、Raymond, *Artisans et commerçants*, pp. 601-607及び拙稿「オスマン朝統治下カイロの食糧騒動と通貨騒動」『東洋史研究』53巻2号（1994年），116-117, 122, 128頁を参照されたい。

と呼称された①・③・④・⑤は軍人であったとみてよいだろう。このうち①のイフサーン・ジャーウィーシュはムスタファー・ブン・マスイーフ Muṣṭafā b. Masīḥ の従者（タービウ）上がりのアミールであり、ナイルデルタ北辺に位置する汽水湖の港市ブルッルス（ブルタズィム）の徴税請負人を長く務めたという<sup>30</sup>。また、ブーラーク警察長官（walī Būlāq al-Qāhira）を務めた経験をもつ④のムハンマド・ジャーウィーシュについて、イブン・アジャミーは、「彼は不正者（ẓālim）であり、圧政者（ghashūm）であった」と批判している<sup>31</sup>。そして、⑥の人物に関しては、州総督の従者であったとの記載があるのみで個人名も明らかではない。その任期には、州総督のハサン・パシャ自らが州都の市場行政に直接携わっていた可能性が高いと考えられる。

ハサン・パシャがカイロ赴任後初めて迎えた春は寒冷であった。『マバーヒジュ』によれば、1014年第11月下旬／1606年4月上旬に厳しい寒さが戻り、冬服から衣替えをした人々が再び厚着をしたという<sup>32</sup>。それから約1か月後の同年第12月末日／1606年5月8日のカイロの食料価格について、『マバーヒジュ』には詳録が残されている<sup>33</sup>。表2にまとめたこの価格一覧的な情報提示は、チーズやデーツの種類など当時のカイロの食生活に関する貴重な手掛かりを与えるものといえるが、そこに上昇や高騰に

(29) イブン・アジャミーは、この学者のムフタスイブに関して多くの記述を残している（*Mabāhij al-ikhwān*, fols. 72r, 95v-96r, 135r, 172r, 173r-173v, 280r）。

(30) *Mabāhij al-ikhwān*, fol. 163. さらにイブン・アジャミーは、知己のムスタファー・ブン・マスイーフについて、ジェッダ港の徴税官職（amānat bandar Jidda）を務め、善行と信仰とサダカの人であったとしている。

(31) *Mabāhij al-ikhwān*, fol. 182v.

(32) *Mabāhij al-ikhwān*, fol. 176r.

(33) *Mabāhij al-ikhwān*, fol. 179r. なお、イブン・アジャミーは諸品目の現行価格を列挙した後に「諸価格は至高なるアッラーの御手において増え減ずる。」と付記し、価格決定の主体としての唯一神の力を確認している。「神の価格」については拙稿「アドルと『神の価格』——スークのなかのマムルーク朝王権」三浦徹・岸本美緒・関本照夫編『比較史のアジア——所有・契約・市場・公正』東京大学出版会、2004年、245-263頁を参照されたい。

表2 1014年第12月末日／1606年5月8日のカイロの食料価格 (*Mabāhij al-ikhwān*, 179r)

品目	単位	価格
良質小麦	1 イルダップ	40-48ニスフ
ソラ豆	1 イルダップ	30ニスフ
レンズ豆	1 イルダップ	48ニスフ
乾燥エンドウ豆	1 イルダップ	60ニスフ
ヒヨコ豆	1 イルダップ	48ニスフ
米	1 ワイバ (1/6イルダップ)	30ニスフ
バター油	1 ラトル	4ニスフ
胡麻油	1 ラトル	3ニスフ
胡麻ペースト ( <i>taḥīna</i> )	1 ラトル	2ニスフ
蜂蜜	1 ラトル	4ニスフ
シロップ ( <i>qatr</i> )	1 ラトル	2ニスフ
糖蜜	1 ラトル	3/2ニスフ
ハルーミ・チーズ ( <i>jubn ḥalūn</i> )	1 ラトル	4/3ニスフ
クルス・チーズ ( <i>jubn qurs</i> )	1 ラトル	3/2ニスフ
サワーリフ系デーツ菓子 ( <i>'ajwa ṣawāliḥī</i> )	1 ラトル	2/3ニスフ
ヤンプウ系デーツ菓子 ( <i>'ajwa yanbu'ī</i> )	1 ラトル	7/6ニスフ
アルメニア胡瓜 ( <i>qiththā'</i> )	1 ラトル	1/4ニスフ
在来種胡瓜 ( <i>khiyār</i> )	1 ラトル	1/2ニスフ
通常パン ( <i>khubz jirāya</i> )	1 ラトル	1/3ニスフ
全粒粉パン ( <i>khushkār</i> )	1 ラトル	1/4ニスフ

関する指摘はなく、むしろ全般的に低めの価格であったと推察される<sup>34</sup>。

このように、1606年5月の段階で州都の食料価格はひとまず安定していたといえるが、同年7月には『マバーヒジュ』に異変を伝える記事がみられる。1015年第3月17日／1606年7月23日、ハサン・パシヤは、「学者たち (*'ulamā'*)、法学者たち (*fuqahā'*)、善行と篤信の人々 (*ahl al-khayr*

<sup>34</sup> 例えば、これに先立つ1013年第8月16日／1606年1月7日の時点では主食の小麦が1イルダップ当たり120ニスフ（1606年5月8日の価格の約3倍）、ソラ豆も60ニスフ（同じく2倍）という高値を示していた (*Mabāhij al-ikhwān*, fol. 153.)。

wa al-ṣalāh) がその翌日にカイロ郊外のムカッタム山に登り、至高なるアッラーに向かい、我らが主人スルタン・アフメトのために不信仰者たちや罪人たちに対する彼の勝利を祈願すること」を命じる布告を出した。これに関してイブン・アジャミーは、

そうした行為はカーヒラで既に何度も繰り返されてきたのだが、全く効果がなく、物価高 (ghalā') と降水の抑止 (ḥabs al-maṭar) という状態は続いた。これら全ては悪行である。

と記し、州総督によって度々下された指定的な集団祈願の実施命令に対し否定的な見解を示している<sup>35)</sup>。

さらにハサン・パシャは、その4日後の1015年第3月21日 / 1606年7月27日にも同種の布告を出した。州総督はこの際、「学者たち、善行と篤信の人々、クルアーン学校の児童の教師たち (mu'addibūn al-afāl bi-al-makātib), 王朝のアミールたち」に対して、シャーフィイー聖廟の近くにアリー・パシャが建設した礼拜所に行き、スルタン・アフメト1世 (在位1603-1617年) が不信仰者たちに勝利すること、そして「ムスリムたちの食料価格の低下や降水 (maṭar) を彼らに恵み給うこと」をアッラーに祈願するように命じた。そしてそれは2日間に亘って幾度も実行されたが、やはり効果が無かったという<sup>36)</sup>。イブン・アジャミーは、「もし彼らの敵に対する勝利のために彼らが至高なるアッラーを畏れ、また臣民 (ra'iyya) に対して慈悲深かったならば、アッラーは彼らに降水を恵み給うたであらう。」と記し、州政府への批判的姿勢を顕示している<sup>37)</sup>。

35) *Mabāhij al-ikhwān*, fol. 188v.

36) *Mabāhij al-ikhwān*, fol. 189v. アリー・パシャが1601年の秋に新築したカラーフアの当該施設については *Mabāhij al-ikhwān*, fol. 75v を参照のこと。

37) *Mabāhij al-ikhwān*, fols. 189v-190r. 当該期のエジプト州総督主催の祈願式については、拙稿「17世紀初頭のオスマン朝エジプト州総督と祈願式」を参照されたい。

エジプトは勿論オスマン朝期にも基本的に天水農業地域ではなかったから、上記の「降水」の語は降雨に起因するナイル川の夏季の水位上昇を指して用いられていると解すべきであろう<sup>38</sup>。当時は水位の上昇が不順であり、具体的数値は示されていないが、同年7月の時点で食料価格は明らかに高騰していた。その後、1015年第4月8日／1606年8月13日（コプト暦ミスラー月9日）にはナイル川が満水（wafā'）となり、その4日後にミスル運河開きの恒例行事が催されたが<sup>39</sup>、間もなく増水が3日間停止し、人々が物価高を危ぶむ事態となった<sup>40</sup>。これに関して『マバーヒジュ』には、次のような注目すべき説明が加えられている。

その理由は、道徳的な堕落、日中の公然たる飲酒、それにルーム人の男たちと混交する娼婦たちがヴェールを取って顔を露わにすることにあった。アリー・パシャや殺害されたイブラーヒーム・パシャの時代にカーヒラでは居酒屋（khānāt al-khamr）が廃止されていたのだが、この頃には既にそれらが数多くみられるようになっていた<sup>41</sup>。

つまりイブン・アジャミーは、満水後の増水停止を社会における違法行為の蔓延に対する神の警告と捉えているのである。さらに『マバーヒジュ』は、これに続いて穀価高騰を懼れる人々が小麦を求め、ブーラクの河岸へと殺到して混乱状態となり、また日没の礼拝後にカーヒラではパンがみられなかったことを伝えている<sup>42</sup>。その後、同年第4月21日／1606年8月

38 「降水」の解釈について詳しくは拙稿「17世紀初頭のオスマン朝エジプト州総督と祈願式」、5-6、10頁を参照されたい。

39 *Mabāhij al-ikhwān*, fol. 191v. 当時カイロでは疫病（wabā'）が流行していたという。

40 *Mabāhij al-ikhwān*, 193v.

41 *Mabāhij al-ikhwān*, fols. 193v-194r. アリー・パシャ期のカイロにおける居酒屋の閉鎖については *Mabāhij al-ikhwān*, fol. 126v にも言及がみられる。

42 *Mabāhij al-ikhwān*, fol. 194r.

26日、ハサン・パシヤはカラーファ墓地の複数の修道場 (zawāyā) とカーヒラの複数の廟 (adriha) において羊を犠牲獣 (qurbān Allāh) として屠る儀礼の実行を命じた。イブン・アジャミーはその理由として、ナイルの増水が5日間停止したこととスークにおけるパン不足を挙げている。そして、その一週間後に漸く増水が再開したという<sup>(43)</sup>。

ハサン・パシヤの任期終了に関する記事においてイブン・アジャミーは、

彼の [統治した] 日々は、私が解説したように、その全てが悪行の地方軍 ('askar al-rif al-mufsidin) によるカーヒラやその他の臣民 (ra'iyya) に対する擾乱と加害 [の時期] であった<sup>(44)</sup>。

と総括し、軍隊が住民生活を度々侵害した当時の世相を問題視している。16世紀末に始まる軍隊反乱の頻発がこの時期まで続いていたということであるが、ハサン・パシヤは1016年第1月15日 / 1607年5月12日にエジプト州総督の任を解かれ、その代わりに、正規軍による諸反乱の流れを断ち切り「第二のエジプト征服」を導いたとされるクル・クラン・メフメト・パシヤ Wazīr Muḥammad Bāshā al-Sāliḥdār (在任1607-1611年) が赴任することとなった<sup>(45)</sup>。その後、ハサン・パシヤの帝都イスタンブルへの帰還後程なくして、彼とその妻、イエメン赴任時に誕生した彼らの子の訃報

(43) *Mabāhij al-ikhwān*, 194v-195r. 州総督によるこうした犠牲儀礼へ取り組みは、スルタンのムアイヤド・シャイフなどマムルーク朝王権が主導した同様の儀礼の実施を想起させる。拙稿「王権とイスラーム都市—カイロのマムルーク朝スルタンたち」『イスラーム世界の発展』〈岩波講座世界歴史10〉岩波書店、1999年、247-267頁を参照されたい。

(44) *Mabāhij al-ikhwān*, fol. 231r.

(45) 「第二のエジプト征服」については、Adam Sabra, “The Second Ottoman Conquest of Egypt: Rhetoric and Politics in Seventeenth Century Egyptian Historiography”, in Asad Q. Ahmed, Behnam Sadeghi, and Michael Bonner (ed.), *The Islamic Scholarly Tradition: Studies in History, Law, and Thought in Honor of Professor Michael Allan Cook*, Leiden: Brill, 2011, pp. 149-177を参照のこと。

がカイロに届いたことを『マバーヒジュ』は伝えている<sup>(46)</sup>。

### 3. 『マバーヒジュ』にみえる石鹼騒動

前掲の食料価格表の日付に先立つ1014年第12月初頭／1606年4月10日頃、カーヒラでは石鹼が不足する事態となり、ついには見出せなくなった。これに関してイブン・アジャミーは、

しかし、それ（石鹼）は隠れて1ラトル当たり6ニスフで売られていた。当時カーヒラには石鹼が多量に存在したのだが、搬入の欠如のため大商人たち（*tujjār*）がそのように行動し、それを退蔵し占有したのであった。

と批判を加えている<sup>(47)</sup>。供給の一時的停止を機にカーヒラの石鹼卸商たちが退蔵行為に及び、品薄となったのである。その結果、「アレクサンドリア石鹼」も高騰し、12クルス（*qurs*）で1ニスフであったものが3クルスで1ニスフとなり、4倍の値に跳ね上がったという<sup>(48)</sup>。しかしこの時には、間もなく同年第12月12日／1606年4月20日にイエルサレム産石鹼（*ṣābūn Qudsī*）を積載した隊商がカーヒラに到着したため、石鹼価格は下降して1ラトル当たり4.5ニスフになった<sup>(49)</sup>。なお、『マバーヒジュ』においてこれ以前に石鹼に関する情報が確認されるのは、アリー・パシャ期の1011年第11月／1603年5-6月の記事である。その際にもカーヒラで石鹼が欠乏

(46) *Mabāhij al-ikhwān*, fol. 26r.

(47) *Mabāhij al-ikhwān*, fol. 177r.

(48) *Mabāhij al-ikhwān*, fol. 177r. 当該名の石鹼が何を指すのか不明であるが、「クルス」という用語からすると円盤状のアレクサンドリア産品ないしはアレクサンドリアからの海外輸出向けのシリア産品であったのかもしれない。

(49) *Mabāhij al-ikhwān*, fol. 177v. 当該期イエルサレムの石鹼には、単価の高い順に、「乾燥良質（*yābis*）」・「未乾燥緑色（*akhdar*）」・「マフルーシュ（*mafrūsh*）」の三種類があったが（Cohen, *Economic Life in Ottoman Jerusalem*, p. 92.）、本小論で扱うカイロの石鹼価格がどのタイプのものかは不明である。



する事態となったが、価格については1ラトル当たり2.5ニスフであったのが4ニスフに高騰したと記されている<sup>50</sup>。つまり、1606年4月20日の下降後の価格は安値ではなかったといえよう。

前述のとおりナイルの増水が停止し、ブーラクの河岸へと人々が殺到し、パンが不足したが、これと同時期の1015年第4月前半／1606年8月前半には再びカーヒラのスークで石鹼が品薄となり、価格は1ラトル当たり3ニスフから5ニスフへと跳ね上がった。これに関してイブン・アジャミーは、カーヒラでは長年1ラトル当たり1ニスフで売られ、高値の時でも2ニスフであったと記しており<sup>51</sup>、当該期の平常値を伝える記事として留意すべきである。その後、同月、おそらくはその後半にスークで石鹼が見られなくなり、1ラトルで8ニスフまで騰貴した。そしてその頃、シリア方面から隊商がカーヒラに到来し、このうち2頭のラクダに石鹼が積載されていた。しかし石鹼商館に入場した際、この情報を聞き付けた「カーヒラの軍（*askar al-Qāhira*）」がラクダに斬りかかり、石鹼を全て奪い去ったのである<sup>52</sup>。ここでの「カーヒラの軍」の構成は明らかでないが、石鹼の不足に際して州都の正規軍の一部が石鹼商館内で強奪の暴挙に及んだ事実は刮目に値しよう。

『マバーヒジュ』によれば、1015年第5月／1606年9-10月にはカイロにおける石鹼の販売量が増加し、一ラトル当たり5ニスフかそれ以下になった<sup>53</sup>。しかし、同年の第6月／1606年10-11月に入ると石鹼は再び品薄となり、1ラトル当たり7～8ニスフに値上がりした。この時、ナイル

<sup>50</sup> *Mabāhij al-ikhwān*, fols. 120v-121r.

<sup>51</sup> *Mabāhij al-ikhwān*, fol. 193r.

<sup>52</sup> *Mabāhij al-ikhwān*, fol. 196r. イブン・アジャミーはこの記事に続けて、カーヒラの多くの場所で殺人事件が発生し、姦通や飲酒が横行していた当時の社会状況について批判的に言及している。

<sup>53</sup> *Mabāhij al-ikhwān*, fol. 197v. 他方、バター油とハルーミ・チーズは品薄となり、それぞれ1ラトル当たり5ニスフと2ニスフという高値を示していたことが付記されている。

デルタのダミエッタ港にシリア Bilād al-Shām から石鹼が到着したとの報がカーヒラに届いた。そこで石鹼卸商組合の長 (shaykh al-ṣabbāna) が「ディーワーンのジャーウィーシュたち (jāwīshīyīn al-dīwān)」と共にダミエッタへと行き、320の粗布袋 (khaysha) に入った石鹼をカイロに持ち帰った<sup>54</sup>。正規軍の一部による強奪という異例の事態を受け、シリアとの海上交易の主要港から州都への石鹼の供給に際して石鹼卸商組合が組合長を先頭に立てるに留まらず、州総督府の軍事力による護送という方式を選択せざるを得なかった点が注目されよう。

こうして海路でもたらされた待望の石鹼はカーヒラの石鹼商館へと運び込まれ、その1階部分の複数の倉庫 (hawāṣil) に収められたが、続いて人々、特に「ルーム人の集団 (ṭā'ifat al-Arwām)」がそこへ激しく (ziḥāman shadīdan) 殺到する展開となった<sup>55</sup>。『マバーヒジュ』において「ルーム人」はトルコ語を第一言語とする非アラブのオスマン軍人を指し用いられる語である。彼らはこの時に1ラトル当たり4ニスフで石鹼を入手したが<sup>56</sup>、この比較的安価での取得はまさに軍事力の所産とみなされよう<sup>57</sup>。他方、小売商たち (bā'a) や香料薬種商たち ('aṭṭārūn) も同商館へと買い付けに来たが、彼らは購入に際して護衛の兵士 (jundī) に対し40ニスフ購入するごとに5ニスフ、つまり購入額の12.5%もの課金 (ma'lūm) を支払わねばならなかった<sup>58</sup>。以上のように、軍事の担い手によるカイロの石鹼取引への圧迫は、この多分に緊急性を帯びた供給・販売

54) *Mabāhij al-ikhwān*, fol. 199r. この粗布袋の重量は不明である。

55) *Mabāhij al-ikhwān*, fol. 199r.

56) *Mabāhij al-ikhwān*, fol. 199r.

57) 『マバーヒジュ』のヒジュラ暦同月のその後の記事に、海路ダミエッタ経由でカーヒラに運び込まれた石鹼の価格が1ラトル当たり9ニスフであり、それから5ニスフに下がったとあるからである (*Mabāhij al-ikhwān*, fol. 202r.)。なお、この時にダミエッタに輸入された石鹼がパレスチナ以外のシリア地域産品であった可能性も考慮する必要があるだろう。

58) *Mabāhij al-ikhwān*, fol. 199r. 香料薬種商が石鹼の小売にも携わっていた当時の実態も注目される。

に際しても顕著であり、それは小売価格の上昇へと作用したと推察される。

1015年第7月3日／1606年11月4日、多量の石鹼、それに織物などの商品を積載したダマスクスの隊商 (qufl shāmī) がカーヒラに到着した。これについてイブン・アジャミーは、

それは長期間カーヒラに到来しなかったが、反乱者のイブン・ジャー  
ン・ブラート Ibn Jān Bulāṭ al-‘āṣī に対する恐れからガザに留まっ  
ていたのである。そして、彼 (イブン・ジャー・ブラート) がダマス  
クス al-Shām から去ったとの報が届き、彼らはカーヒラに到着した。

と記し<sup>59</sup>、さらにその後の展開について、批判を込めて次のような私見を述べている。

こうして石鹼がカーヒラに到着すると、商館 (wikāla) に搬入された。そして彼らは慣行どおりにその複数の倉庫 (hawāṣil) においてそれを専有し、諸市場 (aswāq) に出すことはなかった。しかし、それらは袖の中からこっそりと横丁 (aziqqa) や小道 (‘uṭaf) で売られるようになったのである<sup>60</sup>。

すなわち、「イブン・ジャー・ブラート」の反乱を理由として石鹼を運ぶ隊商がガザで待機していたこと、さらに、漸く届いた石鹼をカーヒラの石鹼卸商たちが石鹼商館の倉庫に退蔵し、小出しにして利益を追求していた事実を伝えており、貴重な記事といえよう。「ダマスクスの隊商」はダマスクス発の隊商を意味する。断定はできないが、途中でイエルサレムか

<sup>59</sup> *Mabāhij al-ikhwān*, fols. 202v-203r. イエルサレムとカイロの間の石鹼輸送における結節点としてのガザの重要性については、Cohen, *Economic Life in Ottoman Jerusalem*, pp. 86-87を参照のこと。

<sup>60</sup> *Mabāhij al-ikhwān*, fol. 203r.

らの石鹼の隊商が合流していたとみるべきであろう。「イブン・ジャー  
ン・ブラート」とはオスマン帝国に対する反乱を率いたアリー・ジャー  
ンブラートを指している。この石鹼騒動の背景に、ジェラーリー諸反乱の一  
部を成すこの北シリアの反乱があったことが示されている重要記事といえ  
るが、ここで指摘されている影響関係の検討のため、以下では主に W. J.  
グリスウォルドの研究に拠りながら、当該反乱の生起・展開過程と地理的  
拡大について時系列的に整理しておきたい。

アレppo州キリス県のクルドの有力家系ジャーンブラート家は、セクバ  
ン（マスケット銃歩兵）主体の軍事力を増強し、ジャーンブラートの子フ  
サインの代に政争に勝ち、1604年9月に同州の州総督という重職を手中に  
取めた<sup>61</sup>。しかし、フサインはオスマン朝軍のウルミエ湖周辺におけるア  
ッパース1世のサファヴィー朝軍との決戦に遅参し、ジェノヴァ貴族出身  
のオスマン朝東方軍司令官ジャアラザーデ・スィナン・パシヤの逆鱗に触  
れ、1606年1月にヴァンにおいて処刑された<sup>62</sup>。フサインの甥のアリーは  
対サファヴィー朝遠征に伴う混乱に乗じ、中央政府の承認もなくアレppo  
州の支配を続けた。アリーはさらに北シリアの広域支配をめざし、中央政  
府と強く結び付くトリポリ州の有力家系サイファー家のユースフと対立し、  
同年7月24日、ハマールでの戦いに勝利した。続いてアリーはレバノン南部  
の有力家系マアン家のファフルッディーン2世の協力を得て、ベカー高原  
の有力家系ハルーフシュ家のムーサーを破った。ファフルッディーン2世  
は1602年の段階で、従来のダマスカス州のサイダー県総督に加え、同州の  
サファド県総督を務めるに至っていたが、同年7月末以降にはパレスチナ  
北部のアッカー、ハイファー、カイサリアまで実効支配の地域を広げるこ  
ととなった<sup>63</sup>。

(61) William J. Griswold, *The Great Anatolian Rebellion*, pp. 92-98.

(62) Griswold, *The Great Anatolian Rebellion*, pp. 98-108.

(63) Griswold, *The Great Anatolian Rebellion*, pp. 110-115; Abdul-Rahim Abu-Husayn, *Provincial Leaderships in Syria, 1575-1650*, Beirut: American University of Beirut, 1985, pp. 81-83.

その後アリーは、ダマスカスで戦力を立て直した上記のユースフと対決するため、ファフルッディーン2世と共にこの州都を攻囲し、同年9月30日に勝利を取めた。攻囲はダマスカスからの逃亡時にユースフが払った大金をアリーが得ることで解かれたが、彼はなおも追走してユースフの避難先のヒスン・アクラード（クラック・デ・シュバリエ）を包囲し、結局両者は和約を結んだ。こうした大胆な勢力拡大にもかかわらず、対外戦に注力する中央政府はそれに先立つ9月13日の段階でアリーをアレppo州総督に安堵したのである<sup>64</sup>。けれども、新任の大宰相クユジュ・ムラト・パシヤはジェラーリー諸反乱に断固たる姿勢で臨み、トスカーナ大公フェルディナンド1世と結んで北シリア独立政権の樹立を企むアリーを特に問題視した<sup>65</sup>。大宰相は大規模な討伐軍を率い、1607年10月24日、アレppo北方のウルチュ・オヴァスの戦いでアリー軍に壊滅的な打撃を与え、アレppoに入って同州の支配を確保した<sup>66</sup>。逃れて各地を転々としたアリーは1608年1月、イスタンブルでスルタン・アフメト1世の恩赦を受け、ルメリのテメシュヴァル州総督に任じられた。しかし、上記の大宰相はこうした転任を容認せず、アリーは結局1610年3月にベオグラードで処刑されることとなった<sup>67</sup>。

以上の時空間的な展開を踏まえた上で注目されるのは、『マバーヒジュ』における「イブン・ジャーヌ・ブラート」、すなわちアリー・ジャーヌブラートの初出記事である。

<sup>64</sup> Griswold, *The Great Anatolian Rebellion*, pp. 116-120; Abu-Husayn, *Provincial Leaderships in Syria*, pp. 26-27.

<sup>65</sup> Griswold, *The Great Anatolian Rebellion*, p. 127. 『マバーヒジュ』では、スルタンが反乱者アリー・ジャーヌブラートのシリアでの「悪行と悪政」を知るに及び、宰相たちに対して激怒し、時の大宰相を死刑に処し、ムフティエを追放し、クルジュ・ムラト・パシヤを任じた、と説明されている (*Mabāhij al-ikhwān*, fols. 216v-217r.)。

<sup>66</sup> Griswold, *The Great Anatolian Rebellion*, pp. 132-146.

<sup>67</sup> Griswold, *The Great Anatolian Rebellion*, pp. 146-153.

同月（1015年第3月／1606年7月7日-8月5日）、以下の報せがカイロに届いた。我らの主人スルタンへの服属から脱した反乱のジャーラーたち（al-Jalāliyya al-‘uṣā）のなかのイブン・ジャー・ブラートという者が、彼の集団（jamā‘a）とともにダマスカスとアレppoの間での〔中央政府への〕納金（māl al-khazīna）の奪取を企てたため、彼ら（送金担当者たち）は納金をもってダマスカスに戻り、随行軍とそこにしばらく留まった。これら全てがワズィールの集団の欺瞞と支配者の勇敢さの衰弱に因るもので、前代未聞の事であった。物事は全てアッラーに属する。そしてこの報せが我らの主人スルタンに届くと、彼は軍を鼓舞して自らのもつから派遣した。それから、彼らとともにドゥワール地方の県総督（sanjaq bi-bilād al-Duwār）のイブン・マアン Ibn Ma‘n が来て、彼らはそれをもってイスタンブルへと旅をし、それは無事到着した<sup>68</sup>。

このようにアリー・ジャーンプラートはこの夏の時点で、エジプト州の中央への納金の輸送も儘ならぬ不穏な状況をシリア北部において作り出していたのである。そして、前述のように同年11月4日にガザで留まっていた石鹼を運ぶ隊商がカイロに着き、その原因がアリー・ジャーンプラートの反乱であるとされているのであるが、その点については疑義を抱かざるを得ない。先行研究に照らしてみても、この反乱は北シリアからダマスカスまでの地域で展開されており、パレスチナ最南部のガザとカイロとの間の交通を脅かすまでの広がりを示していたようにはみえないからである。また、早くも同年9月13日の段階でアリー・ジャーンプラートがアレppo州総督に安堵されていたという事実も重要である。

そこで注意すべきは、ジャーンプラート家に協力していたマアン家の勢力であろう。上掲の引用記事は、マアン家のファフルッディーン2世が納

<sup>68</sup> *Mabāhij al-ikhwān*, fols. 189v-190r. レバノン中部の「ドゥワール地方の県総督のイブン・マアン」はファフルッディーン2世を指すとみてよいだろう。

金の護衛の任務を負い、ジャンブラト家と中央政府に対して日和見的な態度をとっていたことを示すものとして注視に値する<sup>69</sup>。すなわち両地方名家の関係について再検討を促す重要記述といえようが、いずれにせよ、マアン家についてもパレスチナ北部の港カイサリアより南への勢力拡大は確認されておらず、南パレスチナがこの一連の反乱から直接的な影響を受けていたとは考え難いのである。むしろ、北シリアを中心とした政情不安を利用し、カイロへの石鹼供給を中継点のガザで一時的に停止させることで売値の上昇を導こうとする、エルサレムの石鹼工房経営者＝卸商の投機的な企てをそこに読み解くべきではないだろうか。

### おわりに

以上の検討から導かれるのは、オスマン朝エジプト州の州都カイロで生じた小さな経済的事件についての次のような解釈である。この石鹼の不足と騒動の遠景にはアレppoを中心としたアリー・ジャンブラトの反乱が存在したが、その直接的な要因は、カイロの石鹼卸商の退蔵・専有やエルサレムの石鹼工房経営者＝卸商の売り惜しみであり、さらにはそうしたイスラーム的商業倫理に悖る利益追求を許していた、エジプト州政権による市場統制の不全であった。後者についてはムフタスイブによる市場の監督が焦点となるが、特に1606年8月24日以降には州総督の「従者」が同職に据えられており、石鹼の供給・取引の正常化に向けた州総督による市場行政上の介入が殆どみられなかったという点がまず問題であったといえよう。また、州の正規軍の一部による石鹼の強奪や違法な課金の取得が示すとおり、当該期のエジプト州の軍事的な支配体制の破綻が直に負の影響を与えていた点も看過できない。エジプトとシリアの動乱期を象徴する騒動の一例であったといえるだろう。

<sup>69</sup> 当時のファフルッディーン2世の日和見的な政治姿勢については、アブー・フサインも指摘している (Abu-Husayn, *Provincial Leaderships in Syria*, pp. 84-85)。